

死の諸相

—死のイメージ—

最近、20 年来つきあいのあった年長の友人の訃報が相次ぎ、無情を感じざるを得ない。1 人は「風のスミティ」、もう1人はクライアントだったSさんである。（2人については、「オリンピア半島 釣り紀行」及び「コート・ダジュール グルメ紀行」参照。）

風のスミティは、オリンピック半島で引退生活を楽しんでいたが、床についてわずか2週間で亡くなった。半年ほど前電話で話したときは元気だったのに、70 代ともなれば人間いつ死が襲ってきても不思議ではないか……。

Sさんは、昨年カンヌにご一緒したし、数ヶ月前には「ロスに遊びに行こう」と誘いを受けたがが、機会を逸してしまった。ガンのため衰弱し、最後は集中治療室で昏睡状態が続いたという。60 代半ばの早すぎる死であった。クライアントというよりは親しい兄貴のような存在だったので、わたしの思いも深い。

かつて、ラ・ロシュフーコーは「太陽と死はじっと見つめることができない」と喝破した。死は怖い、死は苦しい、それが一般的な死のイメージであろう。われわれは死に向かうとドギマギしてしまう。時代や社会の持つ死のイメージに翻弄されてしまい、死は万人にとって恐く暗いものだという考えに凝り固まってしまう。それがはたして本当なのか理屈的に問うこともしない。

しかし、よくよく考えてみれば、われわれの抱く思念が全てそうであるように、死の観念もあくまでも個人のイメージにすぎず、実体があるわけではない。

確かに多くの人は死を恐れるだろうが、死を平然と受け入れる人もいる。要はその人の生き様、人生観、哲学次第である。宗教的な信条から来世を信じる人には、現世と来世の間にもそれほどの違いを認めない。死さえ来世への通過点にすぎない。

死を思うときわたしが真先に思い浮かべるのは、アウレリウス帝の最後である。

わが師マルクス・アウレリウス帝は西暦 180 年 3 月 17 日、ユーゴスラビアのサーバ河畔のシルミウムで亡くなった。帝はローマ帝国の興廃をかけたゲルマニア戦争のため遠征の途中、恐らく疫病にかかり戦陣で没した。

発病を知ると、帝は息子に戦争の処理を頼んだ後、死を望んで飲食を絶った。病状は悪化し、将兵が嘆き悲しむのを見て帝は、「なぜわたしのために泣くのか。むしろこの悪疫と万人の

死を思いたまえ。」といったといわれる。帝は自分の死を悲しむより、疫病と 10 数年にわたる戦争でつぎつぎと倒れていく将兵の姿に、人間存在の悲哀を思ったのである。7 日目には帝は息子を接見したが、病気の伝染を恐れて直ちに退去させ、その夜息を引き取った。

死に臨んで帝はさほど動搖していなかったように見える。帝はストア哲学わけてもエピクテトスの考えに従っていた。帝には長い一生も短い一生も同じであった。われわれが失うのはつねに現在にすぎず、誰も過去や未来を失うことはない。帝は真正面から死を見つめていたのであろう。

たとえ君が 3 千年生きるとしても、記憶すべきは何人も現在生きている生涯以外の何物をも失うことはない、また、何人も今失おうとしている生涯以外の何物をも生きることはない、ということである。

したがって、もっとも長い一生ももっとも短い一生と同じことになる。なぜなら現在は万人にとって同じであり、したがってわれわれの失うものも同じである。

ゆえに失われる時は瞬時にすぎぬように見える。何人も過去や未来を失うことはできない。自分の持っていないものを、どうして奪われることがありえようか。

——天国への魂の旅立ち——

さて、現代においてもインドネシアのバリ島では、死は生の終わりではなく、来世への魂の旅立ちと考えられている。哲学者の中村雄二郎氏の話。（週刊朝日 1997 年 8 月 15—22 日号）

バリ島の人びとにとって、死者の火葬の儀式は愉快な祭りであって、悲しい行事ではない。彼らの信ずるところによれば、火葬によって死者の魂は解放され、天上の世界に達して、より善い存在として生まれ変わることができるようになる。つまり、死と火葬とは、現世から来世の間に挟まれた、天国への魂の旅立ちである。

火葬が行われている間中、家族も友人も村人たちもいかにも愉しげであり、死体の扱いにはひどく無頓着である。

彼らにとっては、物質的身体は単なる魂の容器であり、大して重要でない。この考え方には基本的にはインド・ヒンドゥに由来し、それがバリでは土着の精霊崇拜と結びついて、独特なかたちをとった。この精霊崇拜を成り立たせているのは、人間の生命の流れは不死であり、死後それが、他の生命体に魂を吹き込むために立ち戻ってくるという信仰である。

バリでは、死についてわれわれとは全く異なった解釈がされている。死は、肉体という古い着物を脱ぎ去って、新しい世界に旅立つ過程にすぎない。

さて、日本人でも死を相対化してしまった2人の例を見てみよう。

自分がガンと知れば、ひどい精神的ショックに陥るのが普通だろう。だが、東京女子大の隅谷三喜男学長は違った。「隅谷三喜男の世界」（朝日新聞 1994年12月8日付夕刊）より引用する。

家内に「あなた、がんですよ」とていわれた。最初に思ったことは「これでぼけないで死ねる」。次に思ったことは、したい仕事がまだ残っている。1年で死んでは哀れだなあ。でもその晩はぐ一ぐ一寝ましたよ。

国立がんセンターで半年間に3回手術をしました。その後で担当医に、あとどれだけ生きられそうですかと聞いてみたんです。1年か2年か。

そんなことは医者にはわからない。それじゃ、わしゃ5年にしよう。勝手に決めて、自分の人生の計画を考えたんですが、そのうち5年がたっちゃった。それで今度は3ヶ年計画をつくった。今はその2年目の終わりぐらいかな。

ガンの告知を得た夜も、ぐっすり寝たというのだから、人はさまざまだと感嘆せざるを得ない。ボケて生を長らえるよりは、病気で死んだほうがマシ、というのだから脱帽する外はない。わたしだったら何ヶ月も奈落の底に落込むだろう。

もう1人、90才の長寿を保ち、大往生を遂げた歌舞伎俳優の尾上多賀之丞の例。作家の池波正太郎氏が語る。（『文芸春秋』昭和53年11月号）

亡くなる数ヶ月前まで、この人は舞台に立っていた。去年、わたしが書いた尾上梅幸主演の「市松小僧の女」という芝居へ出てくれたときも、共に出ている若手を熱心に指導し、自分も舞台裏へ引っ込んだとき、つぎに出て行くまで、観客の目には見えぬ舞台裏で、ちゃんと芝居をつづけているのを知って、わたしは実にびっくりした。これは、自分の役柄になりきっているからなのだろう。

このようにして最後まではたらき、自然に体が疲れ果てて寝つき、亡くなる5日前に医者が来て注射をしようとすると、

「何の注射？」

と、多賀之丞が尋いたので、医者が、心臓の注射だとこたえるや、多賀之丞は、「命日を延ばすだけだ。先生ムダだよ」と、いったそうな。

そして5日後、眠るように、この世を去ったわけだが、これこそ「人間の死」というもので、万人がこれを望んでいる。

多賀之丞の死も、なにやらアウレリウス帝を彷彿とさせる。多賀之丞にとってはベッドに縛られた生など、生きている意味もなかつたのであろう。

——西行の美しき死——

さて、最後に、桜の下の美しき死の例。

西行は、上層武士の出身でありながら、23才の時に妻子を捨てて出家し、72才で死ぬまで50年間を、遍歴と遊行に過ごした。漂泊の旅にありながら、桜の花への思いを歌い続けて、倦むことがなかつた。桜の花に接していると、感情が激し、恍惚となるのであつた。

桜の花への思いを歌つた西行の歌は多い。

吉野山こすゑの花を見し日より
心は身にも添わざなりにき

仏には桜の花をたてまつれ
わが後の世を人とぶらはば

吉野山谷へたなびく白雲は
峯の桜の散るにやあるらん

春風の花を散らすと見る夢は
さめても胸のさわぐなりけり

しかし、桜の花を歌つた、最も有名なのは次の1首であろう。

ねがはくは花の下にて春死なん
そのきさらぎの望月のころ

自分が死ぬ時は、桜の花が咲き誇る旧暦の春2月、しかも満月の夜に死にたい。15日の満月の夜は、お釈迦様が亡くなった日である。

若い時、この西行の歌を読んで、わたしは、わたしなりのイメージをつくり上げた。桜花が爛漫と咲き誇る満月の夜、幔幕が張り巡らされ、ヴィヴァルディの『四季』が鳴り響く。桜花が散って緋毛氈をつくり、西行が1人座り、静かに寂滅していく。この美しく色彩鮮やかな西行の死のイメージは、若き時のわたしの理想の死のイメージでもあった。

西行は、みずからの歌のとおり 1190 年（建久元年）春 2 月満月の 16 日、河内国（大阪府）の弘川寺で桜に抱かれて、72 才で息を引き取った。このあまりにも美事な西行の死は、当時の歌人に大きな衝撃を与えた。

山折哲雄教授は、西行の死は計画的な断食死、つまり尊厳死ではなかったかという極めて魅力的な解釈をとなえる。

死の年の前年の秋頃、病にかかり、西行は命の衰えを自覚した。西行は死を予想し、急遽、葛城山の山中に移って庵を結び、その後数ヶ月をして最期を迎えた。長くなるが西行の理想の死を描いた教授の説を引用する。

年が明けて、彼はゆっくりと食を遠ざけていったであろう。そのたくらみは、すでに前年の暮れからはじめられていたかもしれない。少しづつ食を遠ざけることで、からだがしだいに軽くなっていく。意識が少しづつ、しかも確実に透明になっていったにちがいない。

自分がしだいに枯木になっていく、—その自然のリズムが掌中に蘇ったとき、彼はつぎの段階に移っていった。一切のものを口に通さない段階である。死のイメージの計画表の、フィナーレを飾るメニューである。

それはおそらく 2 月に入ってまもなくのころだったのではないか。1 日 1 日と、その日が近づいてくる。夜の月が輪円のかさを増し、桜のつぼみが華やかに開き、花びらが少しづつ色づいていく。

その美しく匂うような一刻一刻が、彼の枯木のようなからだのかたわらを、音を立てて過ぎていったであろう。

そして 2 月 16 日の、その日がやってきた。その日、西行は、自分で自分のからだを、うしろからそっと、静かにひと押ししたのである……。

最後の日々のメニューを断食と思い定めたとき、彼はその入滅の期日を、ほぼ確実に見通すことができていたのではないだろうか。

当時、死期を悟った多くの往生者は、断食して死んでいる。西行も、また、これに倣ったと

考えても良いであろう。

こうして西行は死んだが、彼は恐らく現代人のような、死への恐怖を抱いていなかったに違いない。自分の命もさほど長くない、と悟ったら、死ぬ時期と死に方は自分で決める。生涯、異常なほど好きだった桜に囲まれて死ぬ。それこそ彼が生きた証であつただろう。断食による尊厳死こそが、彼の望ましい死であった。彼は死に対し、ほとんど恐怖心を抱かなかった。

どのように死を迎えるかは、人それぞれの考え方だろうが、800年以上も前に、西行は理想の死の1つのあり方を示した。死が日常茶飯事だった時代に生きた人々の考え方は、病院で生命維持装置を取り付けられながら死を迎える現代人の死と、どちらが幸せであろうか。

以上、さまざまな死のイメージを見てきたが、どれが正しいというわけではない。人々にはそれぞれの考えがあり、民族には民族の考えがある。ただはつきりしていることは、現代の日本人の忌むべき死のイメージも、多様な死のイメージの1つにすぎない、ということである。死は必ずしも暗く、恐く、忌むべきものではない、かも知れない。